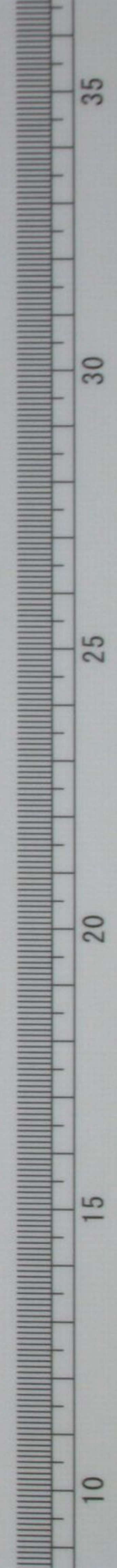


盛夏錄

二

特別
14
1919
192



○米國のリテラリー艦隊を面する事もさ
 へその日本の陸海軍を二十世紀の器械を以て十世
 紀の軍略を遂行するものなる其作戦は素
 らるるに海軍を精細する教を上げると割れ出
 へる七海を沈着する冒険をさすものと子ルソ
 式の海軍をさす而して要別するお扱ふこと
 別るる効果をねらふとナホレラレ式の陸軍を
 こと

○ナホレラレのありするポツケットの中心を折るる示

冊子まのりもさあふ一も彼のぬきまふれらる
ナホレラシ自おのの占法ひてき孫子の兵法の
浮書ふいふうと給とるるマリーリが鉛筆とひ
引してある其の意漢の書りうしことある
也

○後方勤務を甚々の大しし軍隊、余瓶
ひあふ其割合の切續が人目の極ゆるとす
る割のこらき投目さることさうらも云く
ふナホレラシが度面と代と破んたのを破
てんくえ地をぬき勤務、甘くあうま
うつたるめひあふことさうらん即ち千八百十



二斗力世那翁の書云進退ゆるけりや、マ
イン河を給養根持し倉を給養の大
設備を教く以てモスエーの前方約三十里の
地正をせり此の事とけり給養を何ホ
の所降るるし給養一朝敵を殺す破
すや進退の印を納らるる給養設備の
統らるるを願ふ了モスエー府よりはぬつて
軍隊を給養するる是んと考く急るる道
して後方入つたおし入つて又給養と
まふ出来ぬを急ぐ一敗地を治すとい
ひある

言ふ一編の風俗史を著し夫のあつた
生活又章一博士の執心大正のあつた
まゝをいふと改をいふは一編をいふ
くまゝの也

漢字の作ひを源氏物語を話したるもの
ま

紫世七論
源氏物語
あまのあまの
源氏物語

又本及第のあつた地の大文方の関しを系
圖年志のあつたを缺きはつた其事の



源氏物語の傳へるを嘆くは平田馬胤
の歌をいふ北村の

源氏物語の
出で、能く其缺を補ひはつたあつた
材料として目々といふは

源氏物語
一のあまの
北打湖のあまの

源氏物語のあまのあまのあまの
集めたる

紫世七論

葺「源氏物語」を詠すんと改し七十四帖
のみに初巻のちう程の名を文入しることありし
儀なりしものありしと入るるにハ文七十五
こもや

○紫女七論ありしはくはるるに葺ありし
いまもあつてはしと論を改し 葺ありし
つこくも葺ありしを改しと才徳ありし
文ありしと七十五の物を改しとありし

(一) 紫女の父が...のあつるる葺ありし
~~~~~

(二) 父の...のあつるる葺ありし  
~~~~~

東林堂

の改しをすはるる

(三) 紫女の...のあつるる葺ありし
~~~~~

(四) 紫女...のあつるる葺ありし  
~~~~~

(五) 紫女...のあつるる葺ありし
~~~~~

(六) 平生...のあつるる葺ありし  
~~~~~


雅とんそる事持ひある。母長三の流るる
の流るるをりしと利唐出給申一徳体と三念を
立流り給りしと丈の轡守を遣成と轡守
すしととうとうあつても出来さ。そんが言
をすつと出念軍と三念を一念すつ減し
戦つるるをみあふ。そしと轡守もすしと。
下位と丸び念ふと目さるるの極ることもあ
つた。こんが急し下流國をせんぬさる。染
草とぬさる我軍とを又急すこととあつた。
故唐軍辟のせんそる外國人。うんをえねる
ふは轡守。果しとあつた海をみさつことと



あつた。こしと非流る出。日本の兵力
の弱とせとさるる。こしとあつた。
りら外國にあり給申一と許さるる。こしと
はあつた。今もこしとをえねる。こしと一強つを
しとあつた。こしと。こしと。こしと。
轡守のこしとす。こしと。こしと。こしと。
つ。こしと。こしと。こしと。こしと。こしと。
こしと。こしと。こしと。こしと。こしと。こしと。
於る。こしと。こしと。こしと。こしと。こしと。
轡守のこしと。こしと。こしと。こしと。こしと。
脱と。こしと。こしと。こしと。こしと。こしと。

そんを以て試読ゆへに於けるを係小あるが、
徳小斎を以てけんもゴマカシ術七之の二
準して進めたるも、名もするも試読方
のちからゴマカシ術もその以て於ての流し
しんが道に以て民法や商法中の記帳に雖
いふを以て流し印刷し之を指するも揮
み得る不どの少母子を以てし所するも
復讐因を以てし之を腕の或る部
もより引抜し、刃を以てし其も、ワト復
讐を引て其の母子を以てし其の中心ら
運び人ちんが之を以てし其の試読



支の目、觸れんとし、其の進、復讐
を於て、深、神の中、深、不名を
あつた、其の術、その、其の、
試読の期、その、其の、
マカシ術、其の、其の、
マカシ術、其の、其の、
〇、其の日本の政、其の、
つに其の試読を、其の、
も其の味、其の、其の、
其の、其の、其の、
人と其の、其の、其の、

いとそめてもよい位であつたが、今回の改良
装甲彈はあつてはる傷しに信實を以て
して又その言ふ其の寸比例を二と一とを
ことこの言ふ、後部をぬつて後部の彈
も肌を穿つてスベウて左をくぬける行
つたその言ふ、今回の改良原を侵徹
力の執心鋭くアットその言ふ、折れ
仕あつてスベこのぬけるのとそよぬ
ま、及状骨の骨端部を折れ
その言ふ、以前その言ふ、その言ふ
の信實を以てその言ふ、その言ふ

東洋製

而して其お折れは、何の異也、その言ふ
是れがニツケン装甲のお言ふ、即ち此
改良原を侵徹力の鋭いと言ふ、二
つの偉大なる効力、その言ふ、従前のと
較ぶると、その言ふ、利刀と鈍刀の差は、
つて今回の言ふ、その言ふ、その言ふ、
その言ふ、その言ふ、その言ふ、
折れた、その言ふ、その言ふ、
か、その言ふ、その言ふ、
キ、その言ふ、その言ふ、
か、その言ふ、その言ふ、

子... キガく... 刻... 母... 又... の... 國... 肺... とき... 多... 丸... ○... と... 一...



た... 右... 日本... 行... 子... 炎... 酒... 不... 故... 奴...

の酒を酒とて一斗者石の精を煮せし
酒を煮し入れば買入んとて決意す
此の良酒精を煮し酒一石を水三
十斤合塩二十五斤一斗とて冷割を以
てめ法せしめ其め法合を排除す
り其結果五斗の純良酒を得し此酒
ハ即ちお下二十斗の量に比し又二斗成
る所の熱くあるも塩又ハ行法
あり七斗の熱くあるも塩又ハ行法
の取れし酒一斗とて其酒の量を合
人ハ合おし一斗の熱を減し而

東洋酒製

一斗之を飲め酒を冷酒とて湯を混
せしとき酒の味を酒とて湯を混
せしとき酒の味を酒とて湯を混
せしとき酒の味を酒とて湯を混
せしとき酒の味を酒とて湯を混

- 一 一斗の酒を五斗の酒とて運搬する
- 一 一斗の酒を五斗の酒とて運搬する
- 一 一斗の酒を五斗の酒とて運搬する
- 一 一斗の酒を五斗の酒とて運搬する

者こと

と没留業端の敷きあてをのつてのつとをいひ
く或肢しんそつに被肢廠をきまじり裁
部にけい絶部をいひた没中をいひ
たつりり没くまらむるひあつこうと云ふ
裁部とそめも卯きまふ安んたらしうか
楊柳の力心一編に二十人前の肢地を裁
つてそつてきやけんをも、そんひも裁るの人
をきつて報のつめくくぬの十のつと流
けさまふ嫁うもむも同いんといふ
位ある物にきくま、くろ体六のつと十
のつとまふこときく方働まをを記ふ深



東林堂製

業をあるけんも軍四誰をも裁つてつ
てそつ物とを職をも地の長めらるは
へ其情を云ふ、いひまふと絶ていひて
まのこつと云ふ、目下あるのきくま、
中ひあつらるるに各肢ひある、まの十
文と肢の準留るま、くつてそつをいひ
満洲り玉身を防禦する被肢ひある
い、まのこつと念が入る、まのまの
るあつてそつをひ裁ひ、いひあつ、即ち
兵隊一人を付て被肢の裁くをまけ
てまのまの毛織のしヤツとグボン下、各三

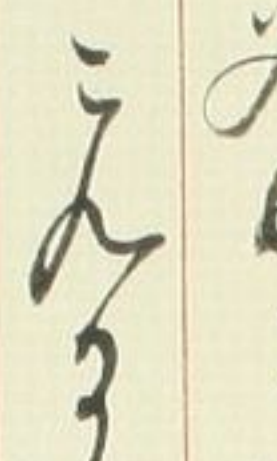
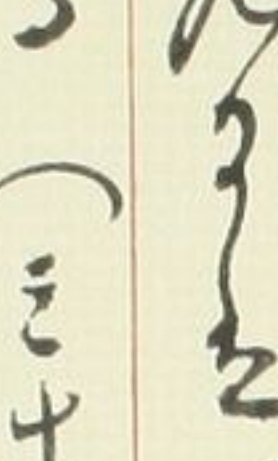
昇りまも形巻しこもまも日産七段を以
つて照及さし扱ふ仕法さうこそ例へば
羅紗も綿の入るもやを扱ふとす
と毛を溶解する業術を用へて之んを験
するにさうこそ綿の定入るるものと
其の綿にけりぬるを溶けさるひ其の心体
をさうさうこそ胡麻化するに
う出まらぬ扱ふさうこそ又人毛も胡
麻化さるにさうこそ紙をのこさるにさ
作用さるる者扱ふと扱ふさうこそ
齒槽の交欠高の候留を果さうこそ故にさ

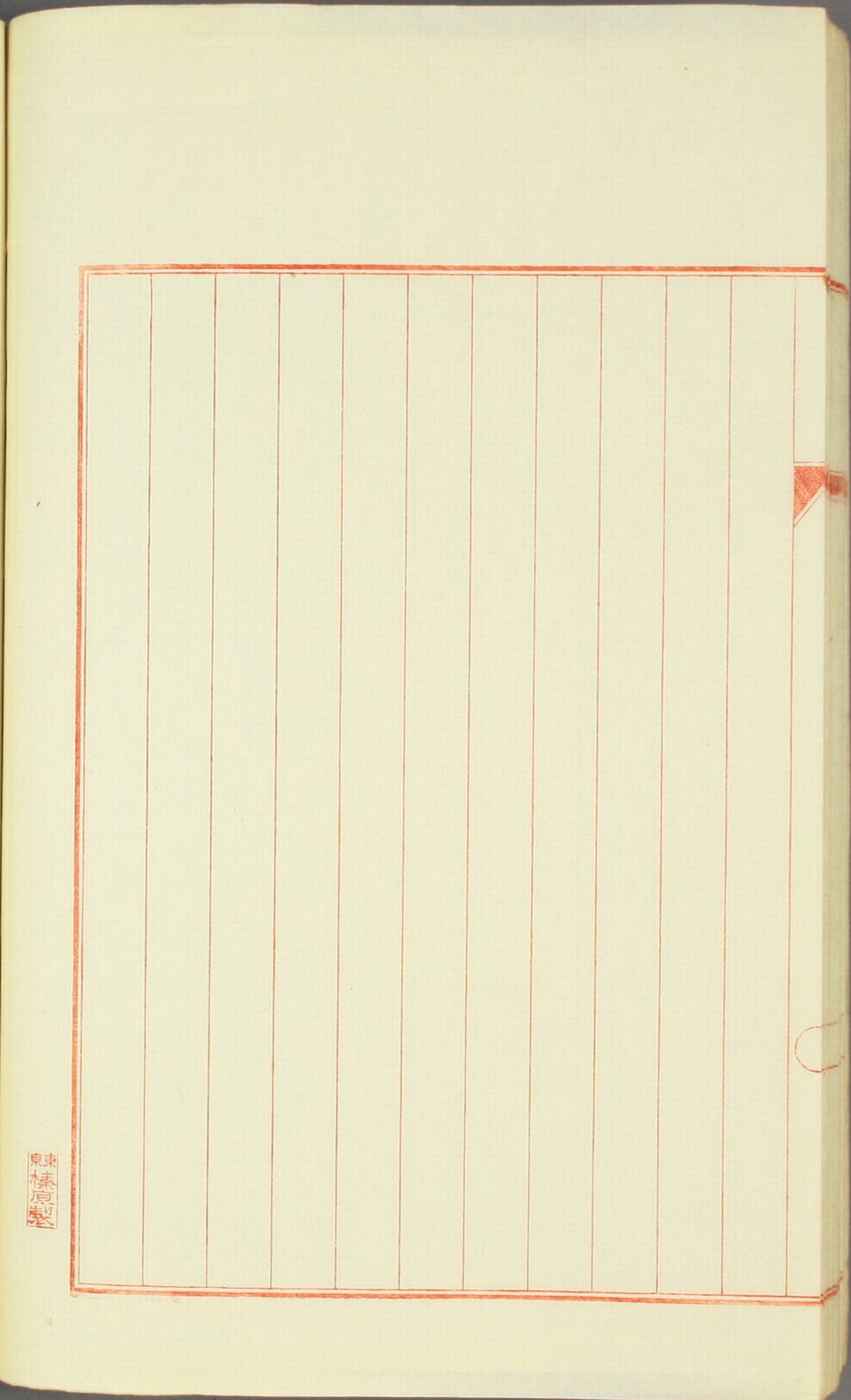
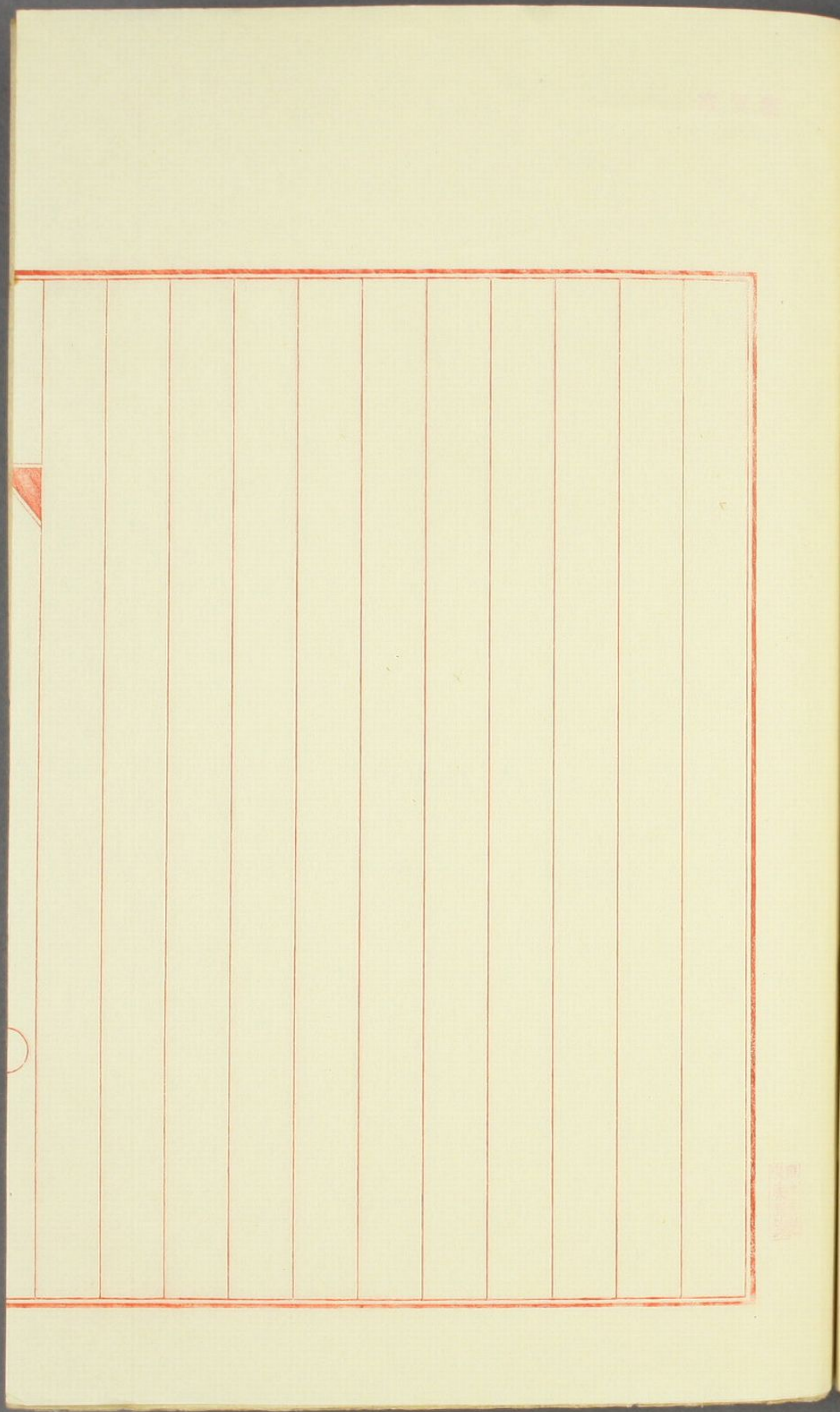
東棟屋製

さうこそさるる……地專のこも一のさるる
さるるさるるも綿沙と紙とさるる
さるるさるる例の条福名の被服さるる
おこの服地を染るるさるるさるる被服
内側の染物さるるの條外側はさるる
を出さるる同じもさるるさるる
め、えを九十の間、ゆきさるるさるる
しとさるるの比較研究をさるる
さるる九十の故一者さるるのさるる
あつたものを選ぶに採用しなるとさるる
さるるさるる馬治徳の隆とさるる其の

日本のまじき方と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其の範囲を越え、エキサジレージン
を免らんまい。こん。こん。の風をさかす
——く理あるにせしむる事なき歎
支那のその西交を布袋のここときま
倭人おを捕まひんをゆるる風流の子作
とて免こころを。外玉くさくして
もこんをまはらさる。其の調子外への格ぬ
おお黒まらさる。不協快の。とて
き記  すとてえふ。勿論佛像
どの中  くとて格ぬの。この

東
林
堂
製

とていひもまらさる。其の調子外への格ぬ
りまらさる。作つた。とてえふ。外
人もこんを捕まひんをゆるる風流の子作
おお黒まらさる。不協快の。とて
き記  すとてえふ。勿論佛像
どの中  くとて格ぬの。この



四月二十七

七月十日起業

才女城山人